

日本民家園だより

第58号

平成17年3月31日

編集・発行 川崎市立日本民家園

特集

かやぶ やね ふ か 茅葺き屋根葺き替え



2月から3月上旬にかけて日本民家園では旧山田家住宅・旧野原家住宅（以上茅葺き）・旧三澤家住宅（石置板葺き）等で屋根葺き替え工事が行なわれました。中でも旧山田家住宅は昭和60年に民家園に移築されて以来約20年ぶりの本格的な葺き替えです。



写真上：葺き上がった旧山田家住宅背面全景
写真右：背面の一部分を葺き替えた旧野原家住宅

旧山田家住宅は富山県五箇山^{ごかやま}の庄川本流最奥、岐阜県にほど近い辺境の地、「桂」^{かつら}にありました。桂はダム建設により昭和45年に解村しました。桂には5軒合掌造がありました。移築された山田家1軒だけが現存しています。白川に近いので通常五箇山の合掌造にはないゲイ下手の小部屋「しゃし」があるなど、合掌造を考える上で重要な位置をしめる遺構といえます。昭和43年に現地で解体・調査し、部材を民家園に運び格納し、昭和59～60年度に復原・組立工事を実施しました。その後、平成5年度・平成8年度に差し茅等の補修をしたものの今回が初めての葺き替えとなります。建物の規模は建坪が43坪と大型の民家で、建築年代は17世紀末から18世紀初期とされる年代の古い合掌造として重要です。平成9年に神奈川県指定重要文化財となりました。

今回の工事は川崎市の自費工事で清宮建築が施工しました。山田家背面全部144㎡と野原家背面の一部葺き下ろし下屋部分34.3㎡を葺き替えました。工事費は1600万円強。茅は5尺締め(周囲1.5m)で約1000束、4トン積みトラック6台分のボリュームです。富士山麓の御殿場からとりよせました。屋根葺き職人は山田家であった五箇山から10人を招き、ネソ(詳細後述)400本、藁縄(機械縄)径8～14mm46束、葭簀70㎡分、針金、番線、丸太等の材料を用意しました。

茅葺き^{よせむね}はかつては日本のほぼ全域で見られました。寄棟造^{いりもや}、入母屋造が多く合掌造のような切妻^{きりづま}は珍しいのです。近畿地方には入母屋が多く、ほかでは寄棟が多いです。材料、工法とも

に地方色が豊富です。茅は主に「ススキ」をいますが、アシ(ヨシ)、オギ、カリヤス等のイネ科の多年草を使う地方もあります。稲藁や麦藁も補助的に使います。竹と稲藁縄をよく使いますが、竹や稲の取れない山間部や東北地方では雑木を使います。棟・軒先は装飾の見せどころで、栃木・茨城の縞模様の軒先は見事です。また、棟の納めかたはいろいろな種類があって興味深いものがあります。屋根面の形状にも五箇山の段葺きや杉皮を横縞状に入れる奥多摩地方の虎葺きなどがあります。

五箇山の茅葺きの特徴は屋根面の勾配がきついことです。通常は45度に対し約60度あります。切妻造で段葺きにします。棟形状が特異で、茅を積み上げた上に栗割材の「ノノセ」(次頁右下写真)と呼ばれる横木^{よせはり}を乗せ、平葺きの棟近くに梁行に差した栗材の水梁^{たるき}を縛り付けます。垂木は五葉松の丸太を使い、柱を取った先の細い部分の残材^{やなか}を利用します。屋中は栗の割材^{やなか}を用います。地震や雪^{すじかい}に対する強度を増すために屋根面に栗材の筋違が入り、これを「ハネガイ」、「コハガイ」と言います。軒先に麻の茎の皮を剥いたもの「オガラ」(麻殻)を用います。「オガラ」はお盆の迎え火に使うものと同じです。茅の量を節約し、色が白く見た目がきれいで、長期間使用できるという利点があります。戦後までは普通に取れましたが、今は副産物として麻葉ができるので厳しく栽培が規制され容易には取れません。今回の工事でも今まで使っていたものを丁寧に解体し再利用しました。

また、合掌造の特徴の一つですが、竹や藁縄の代わりにまんさくという木(10年生)の幹を



屋根葺き替え作業中 茅の上の横棧がまんさくの幹

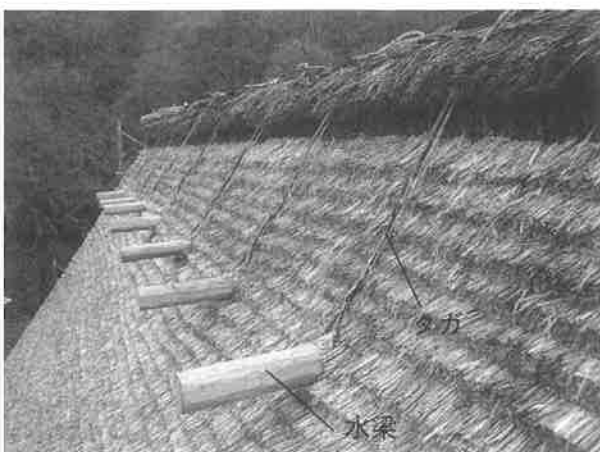


まんさくの幹をねじってネソを作っているところ

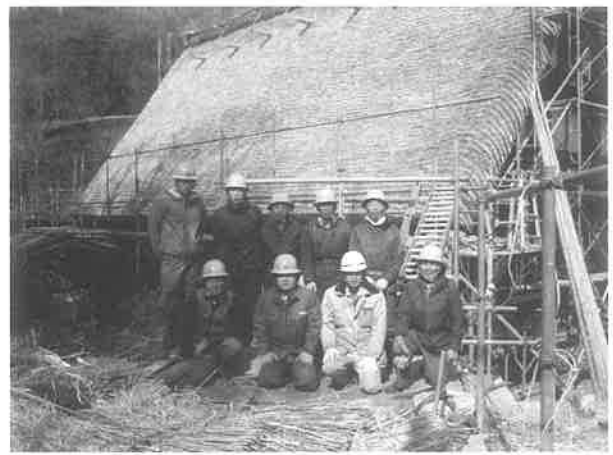


加工を終えた新しい水梁を取付けているところ

使います。稲藁の代用としてねじって繊維状にして使い、これを「ネソ」といいます。また竹の代用は「ヌイボク」といって茅を押さえる横棧にまんさくの幹を使います。関東などでは竹を用い「押鉾竹^{おしほこだけ}」といいますが、茅の葺き厚は約60cmと厚いです。水梁は栗の割材で山田家は1箇所1本ですが2本にするものもあります。この水梁と棟上の「ノノセ」を「タガ」で縛り付けます。「タガ」は古くは「カンコ」という枝の1端がY字状のもの、ふじづる、葡萄づるやネソを用いました。今はマニラロープや鉄の番線を使います。五箇山では雪が多いため棟は一冬毎に補修し、そのため棟積みは年々高くなります。棟上の杉皮は本来はありません。民家園では毎年補修出来ないで杉皮を敷いているのです。棟の端部に茅を束ねた「スズメオドリ」をのせます。その下の^{おが}拵みに「ケショウカヤ」という飾りを付けます。「ノノセ」と最上の母屋・棟木を「クツワネソ」で縛り付けます。「スズメオドリ」は「クツワネソ」を雨から守



葺き上がった山田家
水梁とタガ、タガはネソを使い針金で補強した



施工を担当した五箇山の屋根葺き職人さんたち

る役目があります。

五箇山と白川の合掌造りの違いは、葺く時に五箇山では妻を先に付け丸みをおびますが、白川では妻面の切り口と平葺きの境目が角になります。五箇山では段葺きにします。(ところが野原家があった利賀谷は五箇山ですが、段葺きにしません。利賀谷は昔は白川とのつながりが深かったからだといえます。)五箇山では「ノノセ」が3本、白川では2本です。白川は1回に片面1面を葺くのに対し五箇山では家の大きさや茅の取れ具合で、3分の1乃至5分の1面を葺くので、屋根面に縦の縞模様ができます。現在、合掌造で現地に残っているのは五箇山では便所などの付属屋を含んで約72棟、白川では100棟を超えます。民家園に移築された合掌造4棟は、それぞれ白川系・五箇山系の特色をよくあらわしたものであり、三溪園にある^{やのほら}矢筈原家住宅(合掌造)と共に、合掌造を知る上で、欠かせない文化財建造物です。

(建築職 外山明彦)



野原家の^{おが}妻拵み部
ノノセ、ケショウカヤ、クツワネソ、スズメオドリ

三澤家・旧所在地調査

日本民家園では、今年3月、三澤家住宅（神奈川県指定重要文化財）の旧所在地調査を行いました。

住宅のあった伊那部宿（長野県伊那市）は伊那街道の宿場町で、現在も当時の面影を色濃く残しています。三澤家はこの宿場で代々組頭を務め、旅籠、薬屋を営んでいました。敷地は街道筋の特徴どおり奥行きが長く、70メートルにもなります。民家園に移築された主屋部分だけでも大きな建物ですが、現地ではこの奥に隠宅が続き、その奥にはさらに、現在も4棟の蔵が並んでいます。かつて三澤家には小作人が200軒ほどあり、米の収穫期には俵を積んだ牛車が主屋の大戸口をくぐってそのまま蔵の前まで行き、品質の検査をした上で蔵に積み上げたそうです。

また、薬関係の古文書や資料も、多数残されていました。三澤家では薬を製造していただけでなく、売り子が4段重ねの行李を背負って各地をまわり、販売していました。記録をたどっていくと、その販売地域は地元長野県から、愛知、静岡、さらには群馬、栃木におよび、個人宅のほか、各地の薬屋にも卸していたことがわかります。銀座2丁目の薬屋にも、三澤家の薬がならんでいたのです。

今回のこうした調査記録は、企画展示「伊那の薬屋－信州・三澤家のくらし」（7月1日～11月27日）の開催と同時に刊行する『日本民家園収蔵品目録4 旧三澤家住宅』に収録いたします。宿場町で営まれていた薬屋のくらしの一端に、ふれていただければ幸いです。

（学芸員 澁谷卓男）



伊那部宿



三澤家文書

民家園叢書発行

民家園叢書V

「川崎市内の農家における土蔵茅葺きについて」

（平成17年3月31日刊行）

川崎市内では数はすくないもののまだ各所で土蔵をみることができますが、茅葺きの土蔵というと極めて珍しい存在です。本書は、平成15年末に麻生区栗木で行われた茅葺き土蔵の葺替えに関する記録です。現在、土蔵も含めて茅葺き屋根を目にする機会は減っており、また、茅葺き作業そのものもめったに目に出るなくなっています。そのため、茅葺きを行える技術者＝屋根葺き師の数も減っており、市内やその周辺で屋根を葺いていた方々も高齢のため現役を退いています。今回の土蔵も20年前には民家園でもお世話になったことのある横浜市緑区の方を代表者とする7名の技術者が屋根葺きを手がけましたが、その後、現役を引退したため、土蔵所有者の方が、つてをたどって、はるばる新潟県より5名の屋根葺き師を招いて、葺替えを行っています。屋根葺き替えの実際の経費負担以外に、屋根葺き師を探し手配するという苦労が、未指定文化財の所有者にはついて回るということをこのことは示しています。

今回の屋根葺き替えに先立って、20年前の旧葺き材の撤去が行われ、その際の写真記録とご存命の葺き師の方からの聞き取りから、当時の技法を再現することができました。

このような事情から、本書は期せずして従前(地元)の屋根葺き技法の記録とともに、新潟の屋根葺き技法の双方の記録にもなっています。本書によって、屋根葺き技法一つをとっても、地方によって如何に違いがあるかがお分かりいただけると思われまます。

今回のように、未指定文化財の場合、所有者個人の負担は大きく、その負担を少しでも軽減する上でも、茅葺き技術の地域性や施工者に関する情報の収集と整理を行っておくことは必要と考えられます。

（学芸員 増淵和夫）



土蔵茅葺き作業中